

## ルカ 4:1-13

4:1 (そのとき) イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、

4:2 四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食べず、その期間が終わると空腹を覚えられた。

4:3 そこで、悪魔はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」

4:4 イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。

4:5 更に、悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せた。

4:6 そして悪魔は言った。「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。それはわたしに任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。

4:7 だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。」

4:8 イエスはお答えになった。「『あなたの神である主を拝み、／ただ主に仕えよ』／と書いてある。」

4:9 そこで、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。

4:10 というのは、こう書いてあるからだ。『神はあなたのために天使たちに命じて、／あなたをしっかりと守らせる。』

4:11 また、／『あなたの足が石に打ち当たることのないように、／天使たちは手であなたを支える。』」

4:12 イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」とお答えになった。

4:13 悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。

-----

### <荒野の40日>

「40」という数は聖書の中では、苦しみや試練を表す象徴的な数字です。

紀元前13世紀、いまから3300年前、イスラエルの民がエジプトの奴隷状態から解放され、約束の地に入るまでの「40年間の荒れ野の旅」。

荒れ野は水や食べ物がなく、生きるのに厳しい環境です。しかし、イスラエルの民の荒れ野の旅の中で、神は岩から水をだし、天から「マナ」と呼ばれる不思議な食べ物を降らせて、民を養い導き続けました。その中で神への信頼がいつも問われました。イエスの荒れ野の40日間も、「神とのつながり、信頼」が問われる場となりました。それが悪魔の誘惑です。

### <イエスの答え>

①の「人はパンだけで生きるものではない」は申命記8章3節の引用です。荒れ野の旅の途中、天からの食物「マナ」につい

て語る言葉です。マナが与えられたのは、人がマナによって生きることを教えるためではなく、神によって生きるものであることを教えるためであった、とイエスはいうのです。

②の8節「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」は申命記6章13節の引用です。これは、民が約束の地で定住生活を始め、豊かな食べ物で満たされて、主を忘れ、周辺民族の他の神々にひかれるようなことがあってはならない、という警告の中で語られる言葉です。

③12節の「あなたの神である主を試してはならない」は申命記6章16節の引用です。ここでは出エジプト記17章のマサ(メリバ)での出来事が思い起こされます。それは、イスラエルの民が荒野でのどが渇き、神とモーセに不平を言う場面でした。モーセの行動は神の不興を買いモーセは約束の地にははいれませんでした。

悪魔の誘惑 = 試練に対してイエスの返答はすべてノーです。

### <イエスの戦い>

「時が来るまで」(4章13節)の「時」は決定的な悪との対決の時、すなわちイエスの受難の時を意味しています。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ」(4章9節)という悪魔の言葉は、イエスが生涯の最後に十字架の上で受けた誘惑、「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」、「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみ

ろ」(ルカ 23 章 35, 37 節)を思わせる言葉です。そのすべての誘惑の中でイエスは神への信頼と従順を貫きます。今日の箇所での誘惑との戦いは、イエスの活動の始めの時の一回の出来事というよりも、イエスのこれからの活動、十字架の死と復活をとって神のもとに至る活動全体の縮図なのだと考えることもできるでしょう。

三番目の誘惑で悪魔が聖書(詩編 91 編 11-12 節)を引用します。この詩編は確かな守りを与えてくださる神への信頼を呼びかける詩編ですが、悪魔はそれを自分のために使うように誘惑するのです。「神の子なら飛び降りたって死なないぞ」と。

神の守りへの信頼は良いことであり、モノや安全を手に入れることを願うのも悪いことではありません。イエスも実際、5つのパンで大群集の飢えを満たし、多くの病人をいやしました。わたしたちもパンは必要ですし、健康や安全は大切です。富や力もある程度は必要でしょう。そういう意味で、これらすべてを悪の誘惑と決め付けることはできません。

問題は、自分のためだけにそれを求めること、それを求めるあまり、神との、隣人との親しい交わり、を失ってしまうことだと言えるでしょう。

わたしたちの人生も「荒れ野」だと言えるかもしれません。わたしたちはその中でいつも神とのつながりをどう生きるか、人とのつながりをどう生きるかということを問われています。こ

れは決して四旬節だけのテーマではありません。

この40日間を悪魔をしりぞけ、主に顔を向けて、主を見上げ、祝福の内に過ごすことができますように。